

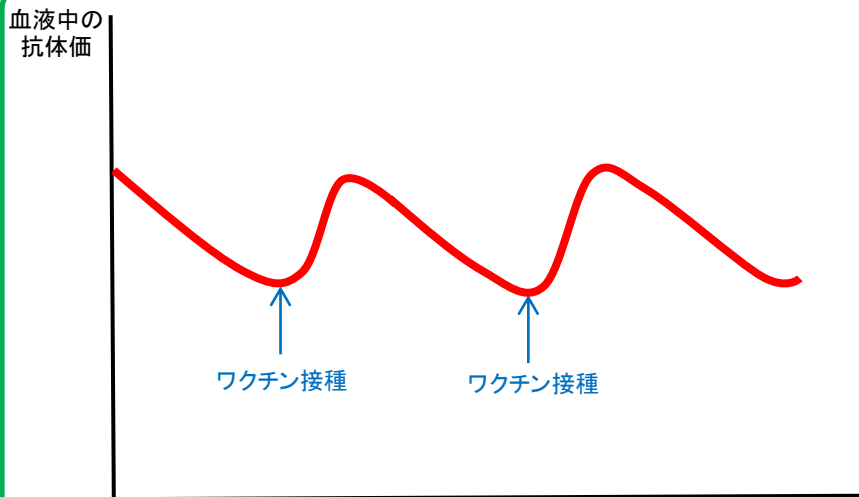
犬のワクチン抗体価検査について

狂犬病を除いた犬のコアワクチンが対象とする感染症には、**犬ジステンパーウイルス感染症、犬パルボウイルス2型感染症、犬伝染性肝炎(犬アデノウイルス1型感染症)**があります。なお、コアワクチンは**犬アデノウイルス2型感染症**についても効果があります。

上記3種の感染症では、**血液中の抗体価と発症防御との間に相関性がある**ことがわかっており、発症防御能を評価するための基準値も多数報告されています。

犬のワクチン抗体価検査とは、**犬ジステンパーウイルス感染症、犬パルボウイルス2型感染症、犬伝染性肝炎(犬アデノウイルス1型感染症)**に対する血液中の抗体価を測定し、各感染症に対する発症防御能を数値化して評価する検査です。なお、検査は少量の採血で測定可能です。

ワクチン接種の目的

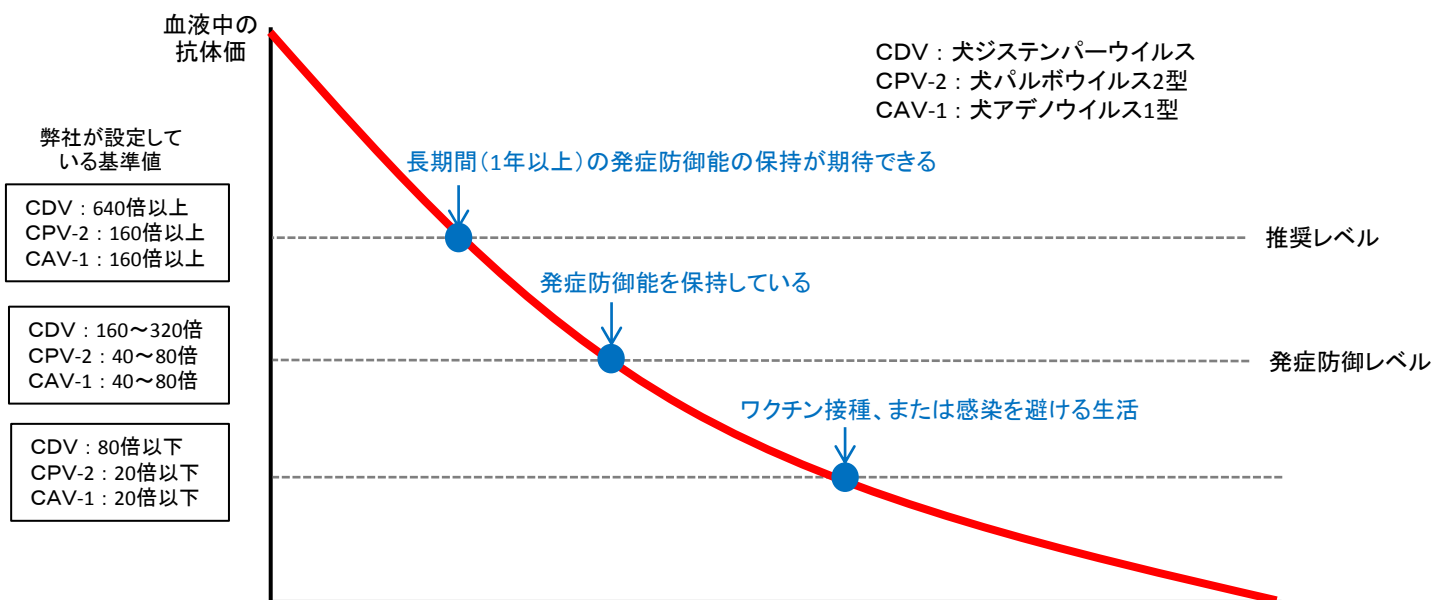


左記グラフはワクチン接種による抗体価推移のモデル図です。

※長期にわたり抗体価が下がらない個体、ワクチンを接種しても発症防御レベルまで抗体価が上がらない個体、ワクチン接種後抗体価は上昇するがその後急激に下がってしまう個体も存在します。

ワクチン接種の目的は、免疫状態を保持することであり、その指標として抗体価検査があります。

ワクチン抗体価検査の目的



あなたのワンちゃんが持っている発症防御のための抗体価を具体的な数値で確認します。これにより状況に応じた生活を心がけることができます。

ワクチン抗体価検査実施後の流れ



検査結果報告の一例

血液中の抗体価 ↓

【犬ウイルス検査】		検査結果
サブ№No.	検査項目	
1200969	犬ワクチンセット/犬ジステンパーウイルス抗体	640倍
1200969	犬ワクチンセット/犬パルボウイルス2型抗体	40倍
1200969	犬ワクチンセット/犬アデノウイルス1型抗体	160倍

ごくまれに基準値を上回る血中抗体価であっても、ストレスや、ステロイド剤や免疫抑制剤の服用により防御が十分働かないケースがあります。また、もし将来的に流行ウイルスが変異することがあれば、既存のワクチンでは十分な予防効果が期待できなくなる可能性も否定できません。

感染を避ける生活の一例

犬ジステンパーウイルス感染症、犬パルボウイルス2型感染症、犬伝染性肝炎に対する発症防御能が低いワンちゃんが感染を避けるには、以下の3点が重要なポイントになります。

1st 他の犬に近寄らせない

2nd 排泄物に触れさせない

3rd 地面を歩かさない

※個々のワンちゃんにおける具体的な感染予防策については獣医師にご相談ください。

ノンコアワクチンについて

ノンコアワクチンとはワンちゃんの地理的環境、生活様式など感染のリスクに応じて接種するワクチンのことです。

ノンコアワクチンが対象とする感染症には、犬パラインフルエンザウイルス感染症、犬コロナウイルス感染症、ボルデテラ感染症およびレプトスピラ感染症などがあります。

なお、犬パラインフルエンザウイルス、犬コロナウイルス、ボルデテラおよび犬アデノウイルス2型については、いずれの病原体も局所感染性であり、血液中に存在する抗体が直接的に発症防御に関与しないため、血液中の抗体価は必ずしも発症防御能を判断する指標にはなりません。

このため、発症防御能を判断する有効な手段がありません。

ただし、これらの感染症の顕性化には年齢や環境要因が大きく関与しており、通常の一般家庭での環境では临床上問題となることはほとんどありません。

また、レプトスピラは血中抗体価と発症防御能の相関性があると言われていますが、多数存在するレプトスピラの血清群毎に感度よく血中抗体価を測定する方法がなく、発症防御能を判断する基準値の報告もありません。

さらに、レプトスピラワクチンの免疫持続期間は1年またはそれ以下であるため、必要な犬に対しては基本的に毎年の接種が必要であることからワクチン抗体価検査の臨床的意義は少ないと思われます。